

氏 名：立川 尚子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲第 250

学位授与年月日：2024 年 3 月 8 日

学位授与の要件：学位規則第 5 条第 1 項該当

論文審査委員：主査 木下 康仁（聖路加国際大学 教授）

副査 山田 雅子（聖路加国際大学 教授）

副査 奥 裕美（聖路加国際大学 教授）

副査 平原 優美（日本訪問看護財団 常務理事）

論 文 題 目：訪問看護事業所におけるオンコール対応を行なう看護体制および態勢づくりの  
マイクロ・エスノグラフィー

#### 博士論文審査結果

本研究は、訪問看護事業所がオンコール対応（事前契約に基づき療養者等からの訪問要請に対応すること）の実施において、組織面での看護体制と運用面の態勢づくりがどのように成り立ち、相互に関係しあっているのかを明らかにすることを目的に、この課題に先駆的に取り組んでいる A 訪問看護事業所を対象にマイクロ・エスノグラフィーを方法論として行われた。

フィールド調査は、管理者、訪問看護師、ケアマネジャーの 11 名を対象に、カンファレンスの参与観察、電話対応の観察、緊急訪問時の同行、当番訪問看護師へのインタビューで行われ、関連資料も収集、活用された。

分析の結果、A 訪問看護事業所は ICT の活用によるリアルタイムでの情報共有のシステム化、運営理念の伝達機能をもつ長時間でのカンファレンスが看護体制と運営面の態勢づくりを統合する機能を果たしていること、および、管理者とリーダー看護師によるコミュニケーション上の役割の重要性が示された。結論として、利用者ごとの療養の時期を見通しながら【療養上の節目や転換期】【療養の不安定期】に対応できるようルーティン業務の中にオンコールの可能性を織り込みながら態勢づくりをしていた。看護体制と態勢づくりは明確に切り分けられるものではなく、情報と認識の共有、合意形成のためには、【やりとりを愉しむ】【挑戦の場作り】が重要であった。

審査委員会においては、フィールド調査が多角的視点からていねいに実施されエスノグラフィーとして詳細な記述ができていた点を評価した上で、より完成度を上げるために以下の修正点が指摘された。

- (1) 主要な分析概念である看護体制と態勢づくりについて定義をさらに明確化すること。
- (2) オンコールの実績の解釈について量的な評価だけでなく多角的にさらに検討すること。
- (3) オンコール対応のスタッフの勤務について、勤務負担との関連でさらに考察すること。
- (4) コロナ禍の影響について記述すること。
- (5) 分析全体のまとめとして、A 事業所ではなぜここまでの実践ができていたのか、この研究から他の訪問看護事業所に向けてどのような移転可能な知見が得られたのかを提示すること。

以上につき、2024年1月23日に提出された修正論文を各審査委員が査読し、十分に対応できていることを全員が確認した。

本論文は、24時間体制での対応が求められているものの未だ課題の多い訪問看護事業所のオンコール対応について、先駆的に取り組んでいる事業所の実施状況を詳細に明らかにしており、独自の工夫がどのようになされているのかを報告している。他の訪問看護事業所に参考となる知見が多く、優れた研究である。

以上により、本論文は、本学学位規程第5条に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。